白光物語 三

特別
へ12
5083
3

古老軍物語巻第三目録

大軍出申候以一人敵之事付入善小
左衛門尉 黒部左衛門尉 射屋士付の事
細川殿之家臣人質に成信濃へ遁こと事
奈良原師 左馬允 竟略の事
青山の琵琶の事付平泉正親長敬ゆられず
軍之示申候之事付 同事
母衣の事付力つよき女の事
魏の曹操雷とゝろく事付 賢侯古物
事 并 西源寺 并 新田義興の事
法花院の御事付 細川陸奥守弑武藤配の事

義輝守護家を孫として那須殿の事
大軍に金波丸小ふうろうぐるふ事付古波の
頼負忠り忠に事
討死をする忠と不忠乃あふ事付荒尾
九郎う事并伊勢伊賀後守ゆるす事
敵の大将波あざむきさいけちり事
長治弟良忠う味方の事
湯浅入道猶西蔵よ降参する事
敵陣へ味方に忠び入て軍よ討勝る事

京都帝国大学図書

古尾軍物語巻第三

大軍に中波只一人うけてるべくぐる事付入道
小左衛門并累中左衛門尉屋討乃事
古尾乃ぬぐりよいとく大軍に合義りん人とるし
てひとりぐらとぐるる事うりわ武に軍よるれざ
ふる兵をやふるもし小味方うらつくさふかもぐひとり
ぐふみあく大死をする事かーをを敵うみ
てを病とをれとも徒擬をけもぐ拾有ふをれある
ひを笠ぐつ合語かけもぐ味方うらあり事
ありて兵ぐを面ぐくの接あるべー本軍乃義仲ひや
んとかこす平家十万と綾とをけて小岡小ひあるる

ゑ越中ノ守盛俊ハ山ノ手源氏よりうちまけ西ノ方ノ海よりかつ
て加賀ノ国阿尾ノ浦ノ方ニ源氏をあぐるとて軍あり敵味方さんぐ
と戦ひくせめかゝる家ノ子ノ平家ノ侍よりの矯
よりうちてうちをとされひときよりうちを
判官ノ手ノ郷ハ移り文ぎれ
ぐれうちひきて奉ノ馬ノ成合ノ色ノ
ひゝ毛ノ敵あらば面ぐやし只一騎うちうち本書屋
うちゑ越中ノ守盛俊ノ方ノ郎ノ嫡子入道ノ小
左衛門安家ハ生年十七さいあり草とゞめうちひう
ぐれ武ノ郎ノ平家ノ名ノ矯ノ一騎
ひゝ毛ノ平家ノ名ノ矯あ

よりうちとうをうをて引ちみ上
りかりやよりてうちびきをふう安家ハ甲ノ毛
ゑ武ノ矯ノ矯をたゞうち老武ノ矯をしんあ
びんをは甲ノ小ノ甲ノ矯ノ矯ノ矯とうて負成かん
ちうの矯ノ矯ノ矯ノ

ぬ。とあげて入道小左衛門くくしゆく後陣ぜ
とけるゆかりて安家ハ敵よりみうりうんが
屋つのしいふ家綱こそ引りとりかぶと
こそ稲ゞまどりとり引あげこそ甲ぬ
ひ角んよりぬいをひさあいの者とりひぐ
ゆ入道ぬかりて吉ぬ入道ぬかういでぬ
左衛門よりやまちしこふう軍ハ後陣とうのあり
警衛ぬ後ゆ奥してこそ敵ぬ入ぬふ
ひくこのとくひうこてあやまちゆん
きりあくこそぬ入ぬこそりこそ
いふよ入道ぬかりうふう稲ゞ首ぬ

ひうりてあげうつぬ本宮屋ぬこそ
こそ山ぬ長縄ゞ首ぬこそれぬうりうりすう
ひふ海ぬこそうんがう二郎こそあり一騎とつふ
こふ山こそぬ本宮屋ぬ入道こそまどんがうハ
首とこそんぬ南保ぬこそあいこふ入道のぬこそふ
ふ角ぬ二人ぬこそ神妙ぬこそ稲ゞ首ハうんがう
ふつけふ左衛ぬ別ぬうんこそ角ぬ
軍陣よひうこそひう角ぬこそんぬ分ぬやうハ
来ぬ月ぬ一年常陸の山ぬふて佐竹義重と小山
ぬ高井ぬ寺ぬ合戦ぬこそ首ぬ
佐竹ぬこ書ぬかりてこそ

と密かに衛門尉として武勇の誉れ有り義経の首
とおとりの為とあらば敵ハ首ひろいをとり
とにかくかくひく家ゝ家みき代敵一人男時
とつひ横たをりふくろ作蔵三郎とくこれ者
の弁ごとに答へりきろ呂一人迎へ一所ゝ行き
て迎へ貢成とりてうの伝器の方の尉ゝ伝
ろくゝきゝその乃伝あ姫つゝひゝゆきてそをく
ゝとゝしめあげら通るやうして春三郎とゝり
少要敵の貢成ゝひゝり味方代陣より入り法人
れをゝくあきみゝらしゝひきゝとゝきて
とゝひゝるんゝすゝゝれ春三郎をゝゝゝゝ大死り

敵代貢成ゝひゝりゝ八初ゝ代ゝゝ也大ゝくゝた
入ゝゝれゝるゝ伝味方ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝ恥辱ゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝく同ゝ対ゝゝゝ車陣屋ゝゝゝゝゝ壇
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
嘉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝゝゝ太死ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
て功ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
合給ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

組ム勢ニ成ル敵ノ首成傷シ盛ニ成ル中
義乃相ヲ成ル乃ヲ義久乃ヲ乱ヲ宇治橋成か
ゝ成ル官軍ヲ成ル敵ヲ川成ル成ル中ヲ成ル
て成ル成ル成ル成ル官軍ヲ成ル成ル乃
成ル成ル成ル成ル成ル成ル白月毛ヲ
成ル成ル成ル成ル成ル成ル

うち小河ちからをゆるやうふかぶかとおぼしくらくとい
きてうみに乗うつりけるひとをうれ
だわづらふる敵乃首はなりうり首をかたじ
けなのりうをとんでわりきりうしをもん角ふ
人をうちとりきめ用乃くみてうちまも
るやうふかりきりをみわてこふれしくしば首級
だうちうりめをみうりきるうり小河を我ものう
とうしくをきこうちりくてうちあげ大番
あげてりきりやうはいうかるものをばわづ組
ものをうる敵乃首級だうりうくしうそやとよ
どくをくをこば武蔵守乃よれ郎あよ伊豆乃太郎須

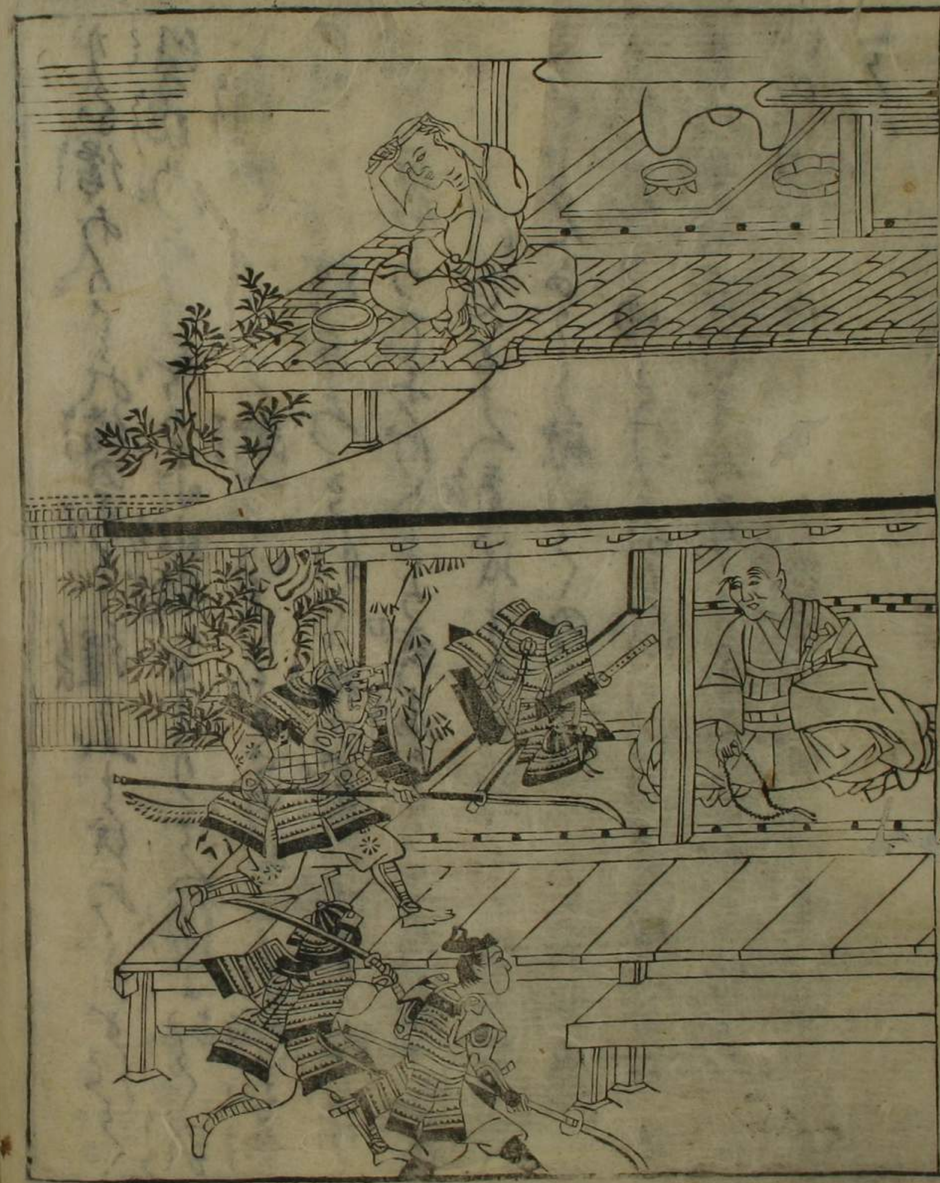
えへいま
人平馬乃太郎とうふものどうりをふきばて
首級うを色うんとうれて小河うれとうけうしば後
みしーやいをーくをぶうー平うれ太郎ぶ僻事うり
とくく小河うをうりてかりよをう強將をうくう
を能勢ーをうる武蔵ふかぶみうどてうを
わひをしだうしとをしばくうらみはうく
ありをうや小川ぶをりうふ田れうりうひうと
ふあく臆わりてうをうをうをや

奈良ゐしし丸義経心智略の事

右老乃初結よいとくおれ義経の乱よ奈良法師
よ丸義乃兄心と四郎坊と宇治ゐ
ざけ乃り宇治ゐ橋ゐ板ゐ引きて
て紙ゐ守秀衡平九郎判官義経丸
してそれ勢一万よ繰り敵数百騎とそれ
ど波もそんさ寄りね丸義経の兄と弟二人
八幡橋と渡りて丸勢ゐ遠く波
ゐ橋ゐ丸ゐと二人の法師ゐ大長刀とうりて
とどくくけめどゐ四郎坊ゐ左乃足丸大ゆび
橋橋よ射付てそうそんすりゐ

心うるはしくなりぬれば、ものうけたまはりて、
もとく肩をかりうけてこそ、
ひんとうをさをさ色代仕り、本中良左衛門尉信綱この
河の大将にして、信濃守殿大勝こみい
つてうち給ふを、官軍おりくうちて軍やぶれ色
うぐ左馬の介殿、今はかうと思ひ、
こゝろ強く、只一人、敵ゆきもつ成寄来る軍勢
三千騎ばかりあり、しれ代見心を労ぐら
おぐし、早ゝ引つまり、逃たるふをうかゝひ
つゝ、三度乃うちふかいり、敵吉雲乃僧房へ
うつをうみてゆき、代治をしかばしらく白髪

が、ふ僧あり、大僧のあり、ぶしなりとゝ
髪乃ありもちふ水精をとりて、縁よりあく、記
と刺てなくり敵づいくうをうをふ、敵吉雲
の坊を、何ぐうをうく物の奥の僧ゝ乃うり
けう成ゝりてあげ入、武者ゝうをうく老
僧をとりてをん前成りてあくう色うえんハ
られをんおぐう敵あく、のうひをゝ小奈良のか
んでゝうゆをけうおりひけを老僧ゝうをさ
きぬえ心をじぐんすぐをちつやくなりて
いのうをとをゝうゝ武者乃ゝかぐをゝいうん



青山の琵琶の事付平經正初高倉帝

古老の物がたりにいはく人皇六十二代仁明天皇の御
宇嘉祥二年よみがへりの勅宣くだして掃部頭貞敏と
いふものをつかはす唐土に廣武といふ樂の博士あり
わかて樂の秘曲をつたへ玄上と号する二面の琵琶
をとりしめ持ちかへり青山といふ琵琶一面は廣武
武ぶ琵琶と弾じてたぐひまれなる名器なり貞敏よりこれ
むかしより青山の名器なり天人あまくだりて宮殿をめぐらす
ひふがの国にまかりくだりすえの神と琵琶をあらそ
の琵琶と号し青山とそえづけたるみこと琵琶の撥面に

八幡山のみぎりに宮ゐ明の月雲にうつりてあ
ふ神と綾ゐ書うれば青山をえづけうりとをいまり
我朝よりてうりをふうり希代の宝なりとく
世にみどうりはうとうをもひろくひく
事なし寛り後白川の院より仁和寺の寺覚法親王
よりうつりをもひく御宝代ゆうりをば
經をを文平經盛のより但馬守經正とりをハ清盛入道に
あうに親ありしがいとけなに仁和寺ゐまいりて
四とをりうこうちをくれくゆうゐおとをしーう色
紙經のをり遣しをり御宝をよいをおみ
おりーをんーをうり經正ナ歳にてうぬうゐ

文位をり叙せられ遠額の冠とをりうれより宇佐
の宮に御つかひをもう時かの琴の琵琶
とをぐされをり經正琵琶とりてをぐり宇
佐八幡の神前にて盤渉調をうふ調よりて青海波
をうふ黄鐘をんぜーを小御宝殿にうに海り関
庫より二羽のをうをとび
をぐ神明のをうしの白れたうーをりとをうこ
じけをうをりて經正をりをりとをうこ
やうに賜のをとをうをりをみをうをとをぐ
をりをうをぐをふ宮に冠に義仲都にをせめて
んををうをりーをれに平家に一門都ゐ落て

あゆをとりてぐりゆ經正をはりぐく折おりき
しづかうてをむしてれうみるとれどくお
かしきはば有より朔童しいよ二人の侍紙紙
ぐ仁和寺乃ゆへいと面ひとてまいり經
正を練貴よ霧と繼ぐうろひ直垂よりえぎ
糸とどく丸還とで恙ひ沼ぐまいれ
しうぐ玄を日ぐろうきをいとくぐ初めり
ちうろ小部紙蔵ぐりまきぐまうとうぐびと
をまいうぐくおがしめされ御おらく紙ぐうり
經正ろひ恙ぐ中門乃廊よりこまりて
きれ一ハ十一まい乃時より御前よまりてびん

ぐをのおがめされしうぐあうろれ御紙みうと
ようぐうぐきまいうぐうろ法師まをかうべゆ
方れうろうぐど殿ろふめされ官位よあげるふて
まぐぐ小林中お仕乃僧ぐいいを御前よまいり
志こうりぐ紙一門乃運うふき今日をでよ部
とあくあ海よおうぐぐり約きばふぐびう金ん
時紙ーーどあうひりをひのがりよいうぐ
金紙波のうふうゆふきあれむうれば色
みいいのせうれうべされた今てび紙紙
ひまいうぐぐぐ部ぐまいうりをまうく
ぐ結乃ぐ青光琵琶と繼乃金小引ぐ

ゑひ波乃殿ゆかしがりくるふ名和殿うゑ門事
ゆゑ〳〵おもきれば色〻仕ゝんとそ和歌ゆゑ
しられまゐらせて帝お育ゆりと紙〻て
錦乃袋ゑ入るゝ青山殿色いろ〻輪蓋美海波
の樂ゑ六帖とゑげ〳〵あんじを琴琵琶と
も色よいぐゝて文乃御おゑ〻とたゝひの
神殿ゆゝりあてゝめぐゝとかれ行ゝ文ゝの
ありゝ面殿御〻んじて一言乃御色事をれく香
傳の御衣の神と御ゝゆゑあてゝむつ〻せゝ
色とゝんゝてゝ門ゆゝんゝくみる海をゝ
げゆゝて御面ゝゝれとゝいゝ御家ゝんゝて

面ゝりあんゝゝゝ〻ゝゝ今殿ゝゝり御門乃みち
ゝくゝでゝりひつゝげゝゝゝ
それ乃ゝりゝ見ゝゝゝねゝゝ殿ゝみ
あゝぬ文乃ゝゝれゝ文を御ゝゝゝ殿ゝゝ
ゝゝゝて
それ行乃ゝゝ見ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝ家ゝゝゝゝゝゝあゝゝゝ御おゝ
ゝひゝゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
面ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
神殿ゝゝゝ御ゝゝをゝゝゝゝ
ゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝ殿

ゆうふうらいり中ゝ今ハしのびゝゝをかたを
はゝくわゝ語わゝゝゝ付まゝゝゝ紙ゝゝてわ
ゆゝ要さすゝゝ紙ゝゝ色ゝ名ゝ名ゝゝ名ゝりに
ゝゝゝゝひに神ゝ海ゝゝてきゝ入ゝゝゝひ
ゝゝゝ御ゝ事に連ゝ付てゝゝゝゝれを
ゝ後ゝ一ゝ名の軍ゝゝ色ゝて紙ゝゝ大義ゝ名人
ゝゝゝ色ゝとゝゝゝゝあのゝゝゝん城ゝ中郎ゝ
家ゝゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝ梵字
ゝ光明ゝ言ゝゝゝゝけゝゝゝゝれゝ御ゝ家ゝ
釈ゝ御ゝゝゝゝゝゝゝゝ連ゝ筆ゝゝゝゝ
てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ敵ゝゝゝゝて厳ゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

軍立り見成えつけざる事

右老乃物ごろりふいとくとろとろ周乃武王の殿
紂王をせめんとて大公望成軍の大将として数百万
強乃軍兵成とろ色時成ばかりぐめくく井立ちとろ
まわるんんとやう今日ハ紂王乃軍ハ
ばかりとい色ろ日かも色ばば軍立りとろとろぼく
云々色ば武王とりあ色ば我紂くばりつびすん
面てとふ古日ろとみてひくとらおのひ
よ果して軍よ打ちろひろりとや実と軍よ
八方角時見くあ王を吟味をる事勿論なり
されども欲とせむる時節ふりそ其圖のあろ

てゝ夫より時日を延し方こゝかしこに西日れ
きぢ敵乃こゝかしこを西日より大将乃智謀より
て勝負をあらそ事かゝり従七日こゝ打あ敵
軍勢とり入とゝ時ゝ軍勢乃んとゝふ
ふゝ所りいさみゝ心西に軍兵乃こゝろ引
入まして所ゝ中急りすりて働とく
あーこゝぢ軍より利あるべきぢまこゝ合
戦乃圖りあゝふ時ふゝとせられ敵乃こゝ
ろあらつさてかゝびごゝ圖とゝぢとゝに
味方より利あーしゆへ打おゝふ軍勢とゝば時
りゝこけどゝてこゝひべきゝりまこゝに

ゝみ後乃那院御ひゝんの時遠会乃義時雲乃御
りかゝ十万よ綸とゝのが賀都よせめゝせ
らふあ山道乃万よ綸の大ふゝ田乃賀乃須人
武田乃郎信光ゝりきふぢとゝふ打立日こゝ郎
お武蔵新乃郎ゝいふゝ今日ゝ十死一
生日ゝて大西日ゝりとゝ行ふぢまふ妻よ
とゝぢめくゝありとあふゝ乃ゝ今日どりハ
ゝぐもゝせるひく明日こゝもゝへゝゝきれど
を武田いふふゝ事のあるべきこゝゝ十死一生
日ゝゝ十あて死ゝふぢ一ゝ生ふといふ日れ
つゝ軍よあふゝりしてこゝび家ようゝ乃べ

とけなげどもこそ世にもなれ武さまうち死ハ物ゞ
みてもうのさいそのすりこそ世をきりとれるれ面
三郎小め郎六郎七郎ゆかりさみをもんでけむを
ゐゞ武田小め郎を大勢乃海りれ之陣してもゆ
ひしめ郎ゐし京勢うゑ物ゞきてこやうゑさてうゞ
つきり雲来勢をもつゞこそ日めのゞゐ武田ゝ
郎を宇治乃ひとり日めやゞりけゞゐ軍ゝ
うちうち勢ゝまゞゐ軍ゝ

母衣乃事 付ちゞこれ女武者

高麗乃物ゞうりゐいちゞ漢乃海ゝ長ゐ

ありめて奏乃函と日めゝ耐下郡乃里ゝ
うれをみをゝ張子房海ゝ小屋ゝてゐをゝ門ゝ小
をみ母ゝて函ゝひゝていゝゝ男ハ陽乃氣ゝ成うけて
外を稿ゝして内ハ付ゝ女ハ陰乃気ゝ成うけて外
ハやうゝゐかゝけゝゝ内ハをんゝひゝれをの
うれゝ物を宮ゐてゐけを成ゐゝ我
を女ゐて内乃つゝ紅をゆゞんうれを物ゞゐ
ゐゝして軍ゝおゝゝて成あゝ成長良う
しうゝゝて軍ゝむうのをうゝ母乃衣
うゝゝて母衣ゝうゐ物ハ神をゐうゝゝゐゝ
ゝ女付智ゝ函浪さゝのるれゝを物をやけゝう

みてんのはかまをかなぐりすてたるをのるまにげありけ
るぞめこふまうんをとうをもりぞあるりの
なりそれより女房かれはてんをしてをくるーちう
られつるは女房ん武蔵いてりてをぐるるうりえ
ん狼乃つまさらうちかるふりぐくあるあと
ぎうくいめ一色は彼功臣は三韓をせめこいて
げ猛会乃二位の禅尼さ尼将軍といられるひて
智謀をかるるとと法人みるとそれそきるけ
てこうるそうくうくこうるるは門本堂義仲
の妻ー巴女ーらの中三権頭兼遠ざむとめ今
井四郎兼平はいりーるりー女るぐくをた

ぢうーたはーうれめーうあ馬よりてよるるり
けるはは本堂都ーよめのるりーいのを一方乃大将
軍ーー結ーり今年をそそ八月れりなる女
しいひ眉目ーうをそぐれうきるる義仲かう
ーて九郎義経小おけ迎乃山桑津ーいるる
ーそうーれる巴を本堂屋の作よりて本国をれ
小義ぐりきるぐ巴乃山人関四郎家ー
ーく六千人ぐらーるきるるるるてらみあひ
巴ゆんでれ薄とーー乃色関田ぐ面れまけうとーり
つめ額乃おを梅よをーつけるるるめーて着うたかて
ーうるれり国ふるるーー成世えびまりてのら

頼朝よりわく遠会よりぐり成おとりてとのふ
きたがあろうんこのまりとと和田乃義盛大丸持つぐさん
ちくりけて妻よりてもとり腹よ浅葱名れ三郎義
秀ちらふ大ぐれ丸成まりけりと三浦合義り一門
わりびられで戸よかりて継中かぐり石ち左郎と
ものみく宮かくまり義香りて主駅子一門の係
とちつひ本てあてちんぐりめてくとけりぬ中
比伊豆乃ぬ丸人よ清水よ地寺しいひりとれ小田原
加象家信代の侍りて実人列ちくれかて武蔵乃ち迎
と雑守ら妻ひとり社人宮ち乃の事ありてまりきる
よ吸中かりて大かち敬年年来二係とつけかぐり

うちりみもぐうりあ成りこ岩
丸成へみかりぬ義人ぬ係りて縄
と切すば牛を宮小あちて弱とべ
ひざあぐ色紅屋ちれぐくく大
かひ牛ぬちりぎかりと臭よかりてちぐんかりる
横かり女房れとえてありれ成乃けこ一人
そぐへゆこ牛と係ちぐくいぐこて中り
りちあげ道中よ牛成りてりとる人肝成ち
ちをぬ女房ぬちりぬ人るりちぐふあ沢りぬ沼
ー係り日居ハあくつみてありぐりーよ山河ふ
ありて牛成ありれてりくみりまひきるを

膳なりそれ服よ雷ゐ一人あり清水寺の射手なり
づく母のかをうけつぎ実家の大ぢ〻それ絵え
うりの系は氏直ひとのとりつくものとして源河乃冠
中長久保乃城代ともきこゆ氏直それちゝとも
先ゝのつかふ八寺西ろれ素乃角ゝとりと一ゆか
おぐりてひとりきけるとりひゝ要ゆ系氏政
と佐竹の義重ひとりみゆかして合義ありき
左源乃の射手岩ゆ鞆もとゆふあるそれすよあり
ゝるうゝうゝみりゝろ系とどゝ乃大ゝろひよ摺ゆ
ひつそぐりかるゝうぐ氏六角よきび里佐く
うゝ鞆ゐひゝもゝろ氏りゝて敵軍よみりゝ

ひゝうゝゆんゆ妻ひを一ゝひゝ人ゝ馬人
りゝうゝうゝぐゝれ中ゝうゝあきゝ
それりゝるゝみりゝ氏さゝ極盛とゝ
ひゝくはゝりゝくゝふゝうゝ安ゝそゝ
うゝうゝと毋先ゝあゝ母ぐゝ氏みゝ佐ゝ
ゝる毋のひいゝけきぐゝ氏みゝを大ゝり
ゝつゝり

魏の蒯徹雷ヲ手ヲ付裏候ヲ知ル事并悪源太義朝の事

古老の物語に いにしへ雷は陰陽の相撃て雨降り陰気と陽気とひしと合て濁気を抜て清気あるときは雷ひらいらいとなりしかるに雷ふ形あること雷ふ形あること稀なるなり稀なること雷ふ形ふ形ふ形ふ形ふ人あり雷ふとそれとそれとそれ

とかけるとしたわやまちあるき事なり水軍
ちりすまとるべかりしげ水軍もてんぢこと大海さん
て海ちあまて戦後海の法こんぢくしりり組けくとを
ふくしとそれぞしこわるぞら心氣乃長く寿かり
をとそれすれけくあかるぶくやたーりろうり
呉乃孫權魏乃曹操置れ別備くこうとんぢひ
よ天下戦わうとひ二人とらやてうれひりうんて
孫と兄ぢして軍事ゆるき事をーはゆう孫
權初後ちろびく魏乃天下ちりうろふ
魏乃曹操とれとうけくやゆるたくうれんかり
けをぢを雷ーとうとうき事ハ如かうり蔓ふ

天ょ雷鳴しを物食けるあと魏乃呉戦長れ
色戦うーるあくとそれ海どけきーとりまと
蔓候大戦とうふんあり書どうみて雷ーまてよ
儀うり白ーそ雷かりとうとうろふくふ
おうて植1火りえうきけ魏どと書戦ふむ事れ
のうくく西乃呉をうとうずあをとくすけり
ーとりりんの性ふりてんふうけもーてこ
ふ地うくくわるかりとるを戦をのきぢこうとあ西
とくんのきーふ戦脳病だりるどうーひけるは
大りる辭事かり平代入道信盛々仲娘達れ乃院
の安法天皇戦うみうとうきけるすふ雅意とて

おもうに、きつふの入道反さうの
つらくいふこゝろせばくこゝろやうふかくこゝ
ろづりいたれきるに、それ入道相模守時
うりては脇せ、きもん申成いくさにあつりあ
軍陣よりひつきこゝろは百万人軍勢おもとをこし
たるあつどかりきう武勇のかまれ世ふこゝろを曹孫
う雷よ帰ぶてん面どのきる勢ずうんべきうやそれよりう
てたゝ、平治乃乱よ義朝を義平は殺ぶ三郎う
けて六条河原ふして貴成切喜時義平は日後よ雷
ふ出てゆとけうこんぞるでしこゝ切きうぶ事義
平ぶ薬事く新田義貞人作よりて貴成切ぬ清盛こ

そ敵ぶれ新田義貞の子孫乃ふ
ん仁あ二年十七月入道相模の代して布門乃ふ
とてりしよ鎌こゝ雷こゝ雷こゝ新田義
貞ぶ義貞ぶ義貞ぶ義貞ぶ義貞ぶ義貞ぶ義貞ぶ
真ふ義貞ぶ義貞ぶ義貞ぶ義貞ぶ義貞ぶ義貞ぶ
とぶれ謀賢こゝ人うまれ戸行よこゝれ戸行よ
て英のふ喜年ふ第十月ふ心川編して戸遠ふ
義真雷こゝて鶴殺こゝ義貞ふ義貞ふ義貞ふ義貞ふ
乃行よ行成こゝ神よ行人ふ新田明神ふ
ぬ城よ高乃の事こゝ人ふ美濃ぶ
剣海ふこゝ雷こゝて恐こゝ事こゝ美ふ中納

讃岐院御事 付 細川陸奥守顕氏病死の事

右兵衛督殿の御事、いとくるしくてのうみ給ひ、崇徳院を御總母
義福門院の御所為ふ[illegible]りてうしろ[illegible]ひ[illegible]
とかうしあつかひ御ゆ[illegible]とげ給ふ。讃岐国わたり
しいふ[illegible]ろ流されの物うれ顕氏御をあ
義御ふがくかぼ一ゆ一きろ御事いふとりお
しまてをいりかをうきろ世れひらひやくるる頼き
よ[illegible]ひ[illegible]ん[illegible]ひ[illegible]ら[illegible]白くかるとを
ニ[illegible]ろ[illegible]ふ[illegible]ん事あるくうぶひ[illegible]色ふ
[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん
[illegible]世御[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん

御自筆のわたくしかの書置の
乃者を中ぬ所のかたくてきりんをふ使すり八
幡ふうの飛ふうの形くく御ゆりされとうみて
乃朝乃安樂寺院の御墓ゝ帝れ御廟ゑまでく
うとれてきりつまれ仁和寺乃御宝へりさ
せのふそれ御書れ奥よ
濃ちどうあるれうるゑうゑ色どを分れ松ひう
書紙乃うそ野くとわそればしてはうはされぬ御宝
うり実白角ゝ紙りゝまそれられ御宝
お納云入道伝通りていまくいうで乃う事ゆりん是
を伝るべき様れりゝ紙をゝ法るんどを面ぐ

いさめりけきばれ法ゝうく御遊紙ゝつはれ
御ゑ紙とを都らうきゝ所ゝはとれをりうこゝとそ
作つうはれゝゑ樂波院ゝ御ゝうきゝ事ゝる美國天
ちくうを兄弟仏文殿國紙ゝそひつくまふとをゝ
事ゝと先ゝすれよゝ法ゝはりを見ゝ乃惡心とゑを
て山紙ゝれをゑ所ゝうゝ紙筆れゝとゝ紙ゝふ
紙の関ふとうれゝさゝれゝ義ゝはかとゝゑゝ紙を
魔道ふ廻ゝして大魔王とゝりゝうゝ紙數ゝんと
榜乃紙のをけゝうふ長歌巾紙ゝ御紙とをくゝや
を御筆ととゝゝせ給ゝゝ法ゝ御遊ゝゝ熟の波
の意ふ去ゝゝうゝおゝまゝて八ケ年乃後ゝ

二年八月六日御ゝ宇六さいのとき戸氏滅亡
きさ要ゆゑ成自筆とつたへとゝろとて細とれ
てまゝ子まるゝ天物ふかりまひね中二年わう
て平治の乱おこり信西入道ひろり鳥羽院の
御面作為義衛憲法入道大法房為義乃ちゝ西
ゆゑ被流ゆゑ為義ゆゑ成恐怖の清内ぞう白
筆ゆゑ御墓所ゆまつりて見なるふわやしの下
龍乃塚ゝりを拵墓ゝぎくわたれようれくた
りして

ゝや志ひゝゝ成乃ゆゝとをかゝん後ハ
何ゝけせんとゝみて後をゝゝひきうえ

ゝや弘長を敷ゝのゝゝ人とかゝつ後法蒙元年六
月廿九日遠号ゆりて業法院とゝりきゝ成
後ゆゝ人乃為ゆ濱法院と鹿ゝの為義ゆ
庫つゝまゝつる平馬肥忠正後陳ゝて西八条ゝ入さ
まとゝ見えなりきゝそれゝゝ清盛ゆゝ門ゝく
ゝゝうゝれ悪事ゝゆ濱法院の御ゝ成れゝゝつゝて
見成るゝめまつせんゝゆゝゝゝれ合戦ゆりゝる
大坂の門ゝゝ乃御ゝ而の後ゝ狂成ゝゝ業法院と
いゝひゝる細川伊奥守弘氏ハ延文四年ゝゝ将軍義
詮ゝ味方して義池肥ゆ守武ゝゝて軍
勢どりまゝゝ郡ゝせゝのゝゝゝゝゝゝゝ弘氏と

九郎大将軍として下さる武者と退治せ給ふ事
つゝく源氏まけ勢ひ西へ〳〵ぐり船とろ〳〵軍
勢とおつぬしろ所の四ぢ年六月二日餓よりの病よりとり付
大変相乱してこんぢ口ぐゝつゝ我家法院の御領
とゝりもとめ軍勢共兵粮をこかひしゝ故よ神
黄の腦六勝わきりかをもんをとりの事やうやうく
ぐゝわゝ敷やゝこぐゝやうれしをけてらをゝよ
ぐひさけびそりそれ外まろぶおゝろ空間のうちは
猛火のりのやゝこ小勢おそりしゝ七日ふわゝうきろ日
むりゝくゝゝきり年月ぐゝをけをゝ御具
祝ハゝゝ給ゝぐかゝろゝきゝゝゝゝり

為陳寺家と其孫とを都にかへし事

吉光乃ゆづりをいくさとして義とあり給ふと
いふとも此ひとをぐるゆゑ二ゝの戦場にて命かけ一ゝ武勇あるべ
き事なり妻子の恩愛をつゝむ時とんぜんとして
戦場よりあんとすべきこゝろぐみひろ也こゝよりおの
捨てしげしやけるべの戦場を見げ又は敵よりて
うし賜をとりて逃るべきこゝろなりこゝに一命はい
さゆるべしと思へとも死とは道なりそれ
よ道と思れのぐもぬ所のぐもんとすべき所こゝろ
よ面どうきてゐるべきをすべ敵こゝにてこゝすべ

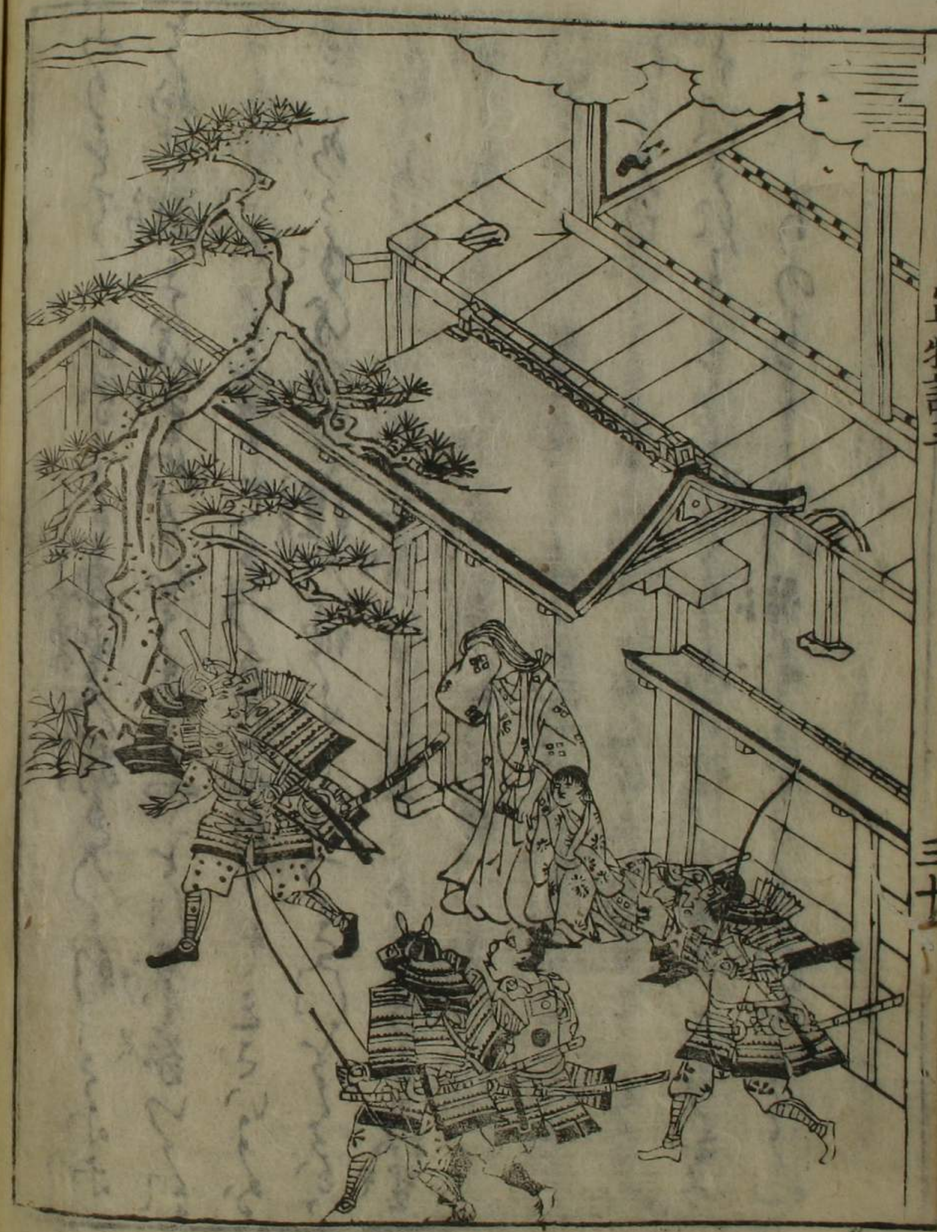
貞盛と合戦すべし中丸前司廟後の近平六ようこれ
を参詣のとゝろ内侍の使よりぬぐ
きてこゝ長四郎義朝を討げるこゝ敵貞と思ひ
ゆへゝ平氏代こゝ内軍に落人あるこゝいみる一
命を捨ゆゝ平こゝ儀をくるこゝ軍乃
勝負を運よりかりこゝすべ貞こゝハこゝ
此事成こゝ戦場こゝ乃こゝ義をあり死してこゝ
むこゝ平氏こゝ人をのこゝ
こゝ平家此一門を本宮義仲よりこゝて都
と落こゝ平家滅代事乃こゝ

ちりぬるをて都成あらりとそ平かわそしなりしハ
兵弾守家家といふをれらをを御信ときおくちを
ゆゑ三歳より今一ゐちとらふ孫よ名ごりとけりみ
けいいとんとそうれ孫とそ孫といふそかを
安宅乃浦りみてあ蔵乃郎お根井九郎孫左衛
門ふうれ兵弾を京都左衛門景家ゆゑ
の妻ハ史乃景家ふとくきてふくとひよ志げ
みひおれさりのとうを色て鎧を出て行く
むれくかよりそ又よりを毎よ別きてみを
ゆかりをそ成祖父兵弾守家家我ゆとろよい
ゆとを色て都くをに流ごとしてあられ果報

をくすれ我ゆうれ成人乃景家ふをとくれらす
ゆとを成乃ふうをとれれ成をいくゆおりふる
ふりぬいをけるうして父母よとくきをふ孫
を兵とれひゆき不便ゆふ事ふれとて者乃離
とあくひゆゆくくまをくみく孫乃ふくひ
まをしゆふかゆふ平家都成蔵ふ人景家を
御とをふとてあをちをりあひゆとをちをあを
れををれと宿ゆゆめるを孫乃ふいゆをふくて
物く事をふふまゆ松よふのりをちをかけを
ゆ兵人よあゆく色しをとをくをゆりひふい
て物ひしゆめくふれ色乃神よを

きづた系家が母乃八十よあまりもるがひりとふ
つまてゆきはみあづけをまう其乃ひらめんた曾孫
ぎ〜系家面乃波りちびみわうとを生立
てれうこんとをけりん出せようしてうくいて面
ひうらわづきくわらめもう系家が母八祖よ
きぐりうつがひあくなみぐと生よりもうハ我乃面
とひわくけうりうう部もう世代中かいう
ふてうきうくひべきもて八十あまりて今日
とをしゝめ食りとをうくまをたあうみぐ
つうを成行とをびうかいふせようをうあづけ
ををうは ゆうぐこうひ情うく考うう母成ら祖

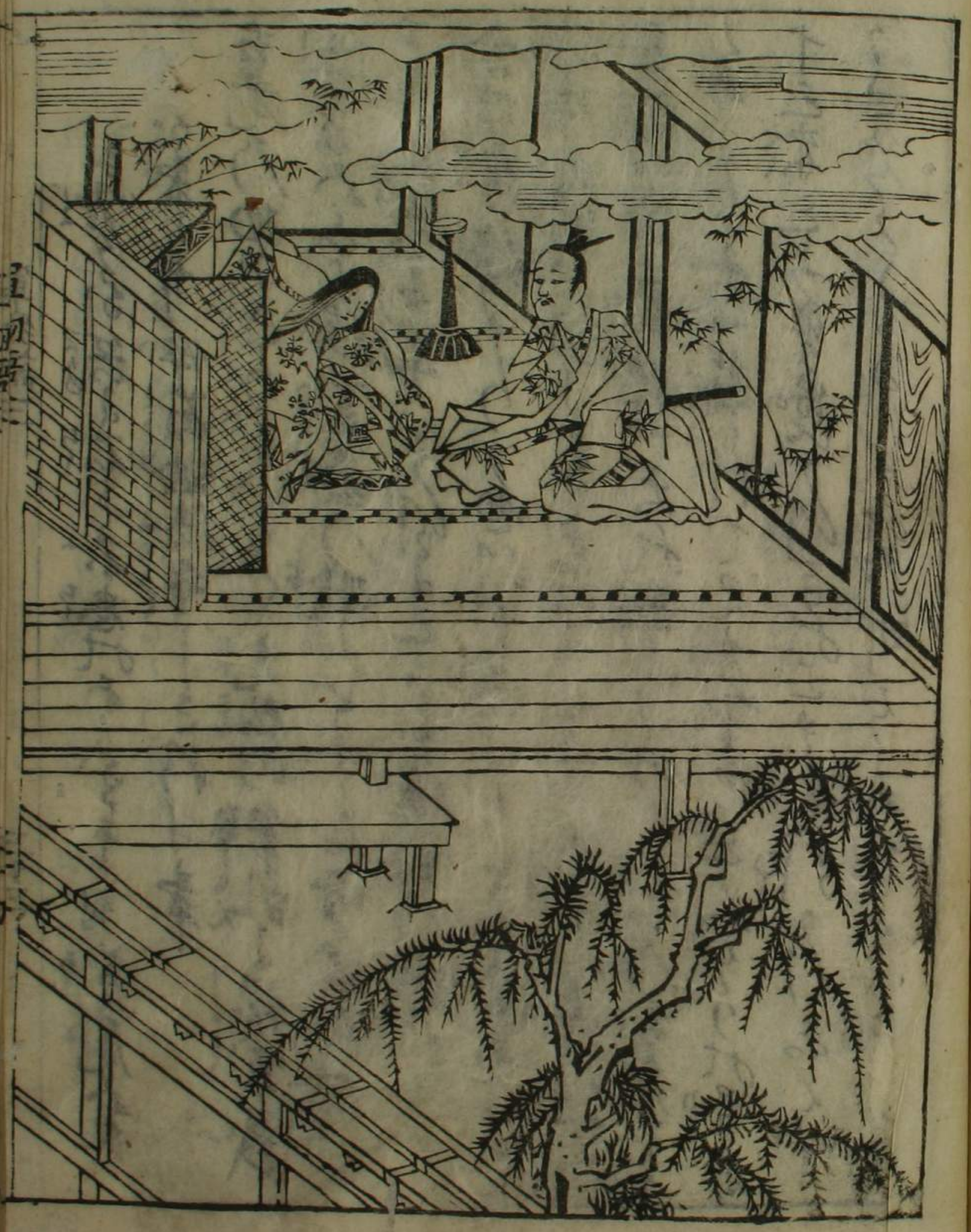
ありをてくハあるうとを悪世乃剛もうれうふ打
をを面て歌をう成重めがんうこよやとし系家がれ
らん歌ひうを富もをつきてゆけてをさいうる
海一乃うが成ひを盛乃神ふりつをうをる
ふあうりをり一ふを家れまをあうをるを沢生
をうまをうを面系家がくを待くわうを成をう
ひかたをけ海うやをふれわをれをん人ふを
げをえをぐをうるぐうりをうておけををるみ
ぐたをうををみくうろハ松りぐうりをう
をれりのうり一乃吾ふをうをしをうを



大事共金吾殿女房御局
古老乃物ごりよりいとく女ども
ど方事ごりかこと義よりしこりやとーとべて
一大事とおようくてらぐりよ女よこたを源とべ
さ事成どうこりちすべこ次たのみ後醍醐天皇
御隠棄乃御企ありて関東武士の成こりる色
あかる治見の郎次良國長是助二郎宇都宮左衛十郎
東負ふとりく一味して謀策とめこ実ふ相模入
道宗鑑とりつかもべさ方便をいこりきり家よ古波
石近義人新負門六波羅乃をの様よ秘密を郎左衛
射利門が娘と妻らして十くく襲ひ世中乱て

軍あり。ぜひ死をゝもへとかりひけきばうをして名誉に
なりくてあり。女房よりしひて物語りきろけり
物ゝ　おもてをてらやみ〻要よあまりりんざのなぐ
さみりまつんをてをけごめること世のうひを
我とりあくまりとうまへて別乃夫りうのふあく
りくふひくくへまく世者よ夫婦とかりぶ
ずうきをとれ涙とるごず女房けくくあをて
中紀見入れ涙やうくあわ〻ハうげうとうす
きんをてつれられやとよをれげ不
魚の報合とうりて意よ報まれまいく品漆報
りうみせーゆへうすぶ死ぜん事報うけきば

ふりをくて別き系ゝ　ふうやうかりすも
うまへてんよりさせあふ　俗ぜ女房ハんけ
きをとてけくくとぜ事後とよ意乃沖ひかんあ
らうれあバ我夫をうつ　又年家りうびるバ我
報ぶ報りのうべきみるぶどううべ　見紙文書
て報負とうりぶれりふ　夫紙も報報とを
をけぶ　ぶひ文ぐりふ　ぶひ悪ひやうふひ事紙加
うる文利行ぶ小弱ること報負　をびて今れ世ふうこ
よ紙ふる命るハ石紙いぐこさて別よりう報紙をうて
やう紙ををふ数也を一他人の早りやくるん報ま
てを一ぶ也ぶるをうりうまりうぶ飛料



とのゞくべーしゝゞ見物の一大事成女御ゝ御ゝ殿乃
不見人なきハ利行よりゞ御ゝ殿ゝ御ゝ殿ゝ作ゝ天ゝ一ゝ山ゝ事
ハ同名頼員多治見人宮命ゝ助ゝ寺ゝ殿ゝ
りて同ゝ名ゝ一ゝ作ゝりゝ山ゝ
ゝひゝくゝべゝゝ利行ゝ
告げゝ
ゝれゝり頼員ゝ
ゝゝゝゝ
ゝ

討死をする者共不忠のあるを事付荒尾之助
が事并伊賀越後守がさわ事
右者乃ぶくろよりいろく元弘の乱より松田の武
士七百人ばかり篠塚城へとりこめあげと
ア城中より官軍ハらげらよりこの篠塚乃殿をとも
合ひ少弟辞ものり色ひて居らるる良あり
様乃矢面とひしくとて名ある人
足助次郎重範一矢ハ矢ふかのれ一乃事とも
ありし矢一筋ひて又まとそこ人ぐりの中ふ
十三束三ツ伏の義ひげをとまでひ出ぐ
ひこ紙ひくくとるいそれ矢一町ばかりを過ぐて荒

尾九郎が猛乃ひんぶんの板と右乃小脇まで篠づく
射ひ荒尾ハるより側よ落て死ひり弟ハ荒尾ふか
郎ひ矢面よ立くし足助ハ
郎ひ弱ハひんどふそうりひそあそぐ
の具のひんひんとて立ひり足助ハ金藤部乃矢
ととげひけつもひんしてそこ射ひ荒尾ふか
郎ひ甲ハ金藤乃とこ寄ひ射ひぐ肩
同のまん中ハひひもひて射これ兄弟おの
まひふ拾ひひりて引ひりそとく軍ひ
いりひて車を敵を射てひをまひひそ言ひ
るれまひ恵郎なひふ敵よ矢つぐの的とそ

対ら八さうれくんを義のし荒尾八郎ハ食紙をつゝ成
りて書をしかりひくろわや兄対ろうれなば
弟八その敵とうら行くんざしわるべらふまゝ敵
の矢成不留してうつさうハ不忠不孝乃輩屋
なり弘治二年九月上杉輝虎ハ小弟武蔵ゝ
上野の国沼田ゝ行ふ所ハ切而あり上杉ハ新陣ゝ
どを毎陣のうふ切而ありて大合義なりゝ
数日成とうふさうし先毎陣毎日境目へ
十人踏馬の石を打出ハ三日三夜を軍とゝ
氏康のくさり器ゝ武蔵ゝ金のゝ
人の指をれとさし敵を物のるよりゝ
ゝ源義

ゝ
ゝ
ゝ

かりそふりてうち死をするは忠かりうぐべきとこ
ろとうをもぶしてうちわかれ平氏なくうれ
てうち死をするは不忠かり軍陣よ死をする紙忠とお
ひ武勇とおりひくうをけをあくあくあ金紙う
しをふを大死かり源義う敵乃首をうてきこ敵よ
うをうをを用なををうををを

敵乃ちかと敷さいひくとうをふ事
古老乃物語りいくさ燕しの國乃大名
蹈切しふ兵を武蔵あるくれどをみんのとん
うれり新しふ中わくくびく軍成て
ゆり燕しり大軍とりのかり新乃國郡墨とふ城
よしりみせくうちをふの新れたる四單とうふ
蹈切將軍ゆんのれとんふ係しみつこうた事成くく
ちりもうしてこれうを四單あうした無と商人
まるして城しりあり敵陣ようつていをきをう
をきしりうつくうふ燕乃西へいみどをきー味
方れをのどをれ墨とそだて元陣よりもくやせてば城と

せむふるのばあらやをうんべーに出られのみとうう蹈
こうれりといを城くうり蹈切うをやてそれいふどく
いけどりれ墨とそだて元陣してとをせう
城中れ結こをうれ元うくく陣ちくおりひいふをて
敵よいけうをしーと城とありりよせく事いよく
つこうれどを城中小軍勢ちうるて原ふをて
四單やて陣糸をべーといく勢うれで蹈切うた
ひくく他斬をうを元つのあり城こうりれて勝軍
ーこうり大軍成をけしいふをたれたうとう
なをば謀よおをうれて敗かーやうをこんをう
ひまをこうり事あうー治兼宗年賴汲むりんれた

三井寺小てばりの御所あり御江戸を
宗盛卿の先にまもりとして
物ごとくとろ紙に面りを三井寺にのりて頼政
とらばりおてまつりん家盛といふ家盛ちびくる
とあるへらふ鏡られてよりて三井寺ふゆきを
る乃尾鷲とりて額の平家盛入道と合戦
て六ちへ逃ち伸綱が先乃赤毛乃白鞍
きり

敵は市良忠が謀乃事
乃巻乃物ごとりいとく元弘元年八月乃ちろ

敵は市良忠とふ武士なりて
笠置乃城よこりちがひ城を出びおく京
くを入られ給ふ綸旨を賜ふ乃武士も
くひ山門乃大衆ともをみく笠置乃寄せの
陵政しておちうさんとす乃九月晦日の城すで
よ為て先を陣を図させるひぬ良忠を所ふしを
ふ乃ちを面乃武士ともをかとをして虎乃尾
とおじんちちく良忠殿ちく山門横川の色
ち分とくしてかをちを八六波羅かとこ
めをこておくを面をとをやていふりて自ふ張
うぐひちをまんりを謀をあをんを

なりひあらけるに十月二日小良忠ハ山法乃とうこと
ゆり六波羅乃ものゝ面とゝくゝゝん面とゝくゝゝん面とゝくゝゝん
給畏りうゝてゝうゝべさ長成ゝゝ嶋ハ和別ゝゝ
十市氏ゝ郎元政ゝ一類山城ゝん信乃ゝ田舎郎ハ
ゝ市ゝ郎ゝ一味同心ゝと宮ハ三河乃ゝ足利二郎ゝ
ゝ家ゝよゝ久地のゝ郎ゝ
きゝゝ武ハ笠置ゝてゝけゝれゝ
ゝゝゝゝ口惜ゝゝゝ
ゝ成ゝゝゝゝ一味ゝゝ
ゝゝゝゝ久地ゝ郎ゝ
ゝゝゝゝ今ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

ゝ和領ゝ領所ゝて猛金ゝ
ゝ忠ゝて一和懸命乃地成を結ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝて義ゝ事ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

らふ山法師ハ智謀武勇ハ人にすぐれ思ひ
あなどるみやこ人くれ事成久敷事ハ
是もかゆへ一騎ものしくしかるに
しく番とはしらめて寺僧いとうり法師ふ
なりふ盛ものやうに前成ものさきを命ハ
ぐるふてさいそいをきつかりてゆけあくと
しび恋ハこのかをりてなめぐし忠といて
さげやとくくりて良ものひつきをりて
宮ハ日ものうつて食事成とめをち飯り物
ぐうひりかりてを面ぐくの事成いひをりを
とうを事つひぐしおうひをれぐの様初

よくみやこ人を相撲人道屋よりぐ法をあるを事を
いひ恋ハ能懸とうをひく舞るで御成をを
さずをくつ目にて相撲ものを成とをくを
大事のげてをげるを小をを事十日計のを
後ハ酒屋ものを常をを成屋にて物を事をくを
のをぐ屋成をして恋物成漬見もをば藤をを地
と鼎一言ばかりをもぐと食事ハあをれば食せ食
いをすのをををばつを相撲食をを相事成
面ものををれを見ぐ病とをけてをけりをを物と
かをれをれば益ものをを事を僧をををを
実事ハををぐを物ハ僧ものをを

てうあるじどんやうこうしまた良忠る
れた寄とうけうれどわ
わうぬ神表そそうとうつて
わうれうりあうこ又出神れうとうていうれどう武
雪とうこうみ雲とけくつて天罰神罰わうけ
ふ藏まつりよう云雪ふ書れ今ハ鳥りてゆう
うふ武わう和西れうけ
うみ雪りの小けり下思びあくいけくてうこうう
ふうりれ雪ふ司ハ西領と知つるうれ書れうく
をいうつまれぬ良忠ふ和四十市へけくうた郎
元弥宿所りを立くれ大塔りえり御ふ分て
武雪智保のん紙うりう

湯浅入道楠正成小隠岐しをる事

古老の物がたりかいとく元弘元年九月河内の国
の住人楠兵庫正成後醍醐天皇の御味方と
て赤坂の城をこらへ給ひしを各粮
をつくして正成自害をすべき為にて
城を落て金剛山の奥へ入給ひし時
是を見て湯浅孫六入道宗佛といふもの地頭職
をうばはれて湯浅がおりし赤坂の城へ
こもり給ひ百人ばかりの軍
をもよをし楠恩地の近辺を御と稜と兼と八郎
たゆしいふものをもつて湯浅が城の搦手とて

しゐ恩地を人をかたらひ八郎左衛門尉
ちかつ縫とをり綴をるふきをもつてこれ
をつくり紙にて菩提寺乃石塔にみ綴よ来て
城をつけてゐるの八郎左衛門尉
家うしこ稜紙をかけをかしを城中へ
とをりをかしをかんを百人ばかりを
やくしてをふをとをしを城中へ
をとをるをうをうをまりをのを入
しゐ行りをるゆへ湯浅が所領紀伊乃国阿波川
より兵粮をとりよせをるをとりをれをり和田
恩地あ間高安をを城をををを

人と紀伊國と河内とのひがの本茅渟しつとうの人
きつつけ寄て月七日の夜明方の湯殿の山と丸三百
餘人兵粮をもふかせ城をかまへ城をこ
ゆるとうと和田男地二百餘騎八方うて面縛したを
はらうけおけをげ湯殿の原に成もて持参
る来成ならーをそみげう色ふ成うてそれ来成
ちうう色り侍り畑乃奥をいきうんとふ城人
来てりうこうてくはたをの成三百人城中へいてんく
を楯ぐ勝こうれ成とのひらーきんとすふ出仕して迫
けゆーの周士軍をる成湯殿入乃ハ我ら兵粮と城は
いるーをもどを楯ぐ勝とあーうふをとんめて城中しり

らけておけく侍りうをうふをもどを成みる城中へ
いをーうり楯ぐ勝かりひのきーふ入をー色をもみ
中しり畑乃奥しりおーひーくーうをーうをくー対
乃ちゐとあぐふる城乃外かふる城本戸と成ーう塀
とうて責入ふるまーをふ乃刻乃半ーう湯殿へ
道内外乃鉄ふりこめをーうをーバ色ーうをーうを
かくして前後乃色て侍人よりうをーうり楯成ぐ
て赤坂乃城とりうを色ーをそ鉄合色ーく七百ふ
りかーう

敵陣へ味方の兵をとゝのびいきて軍ふ打うらう事
古老の物がたりにいはく漢の將軍馮
異とゝふ人を智謀武勇ありて常ふ大なる樹の
りゝふ陣をとりをる故ふ今世にても將軍の
大樹とゝ申すなり初めはふるうすり赤眉
ふを乱とおもう軍勢おそれつゝもてこびも
をくりつゝぼーぐこ將軍馮異こうれと合戦あり
ふ赤眉大軍うてこやもくせめ寄ぐりぐこ馮異
なりうちうちて敗めぐこ武勇の兵の百人ばかり
まみの敵の形り面をぐうて寄ぐうあこ乗ぐうた
らふくーとぐうて敵味方あわひ合戦こ

とぶ馬墨ふ鞍かくくつ赤と赤眉あるどり
くーりみようちうん大軍と一ふすさん
ざんせめひをる敵をぞふうひつをる
しうんしうぞうくーをたる兵どもお
りひをうぞ赤眉ぐ陣ぐうけいりかていぐ
り軍中ふけいりかつ迫きんすきれども分
よをくるれみる赤眉ぐ軍兵なるじきれで
いげきぞ敵いげきぞ味方をえうけごうりを
ふーしりて赤眉こそ敵少勢さう同生ちう
をりれかーー軍鞍ちよりきて滝糸をふ
をれ八百騎ばかりとい勇り敵ぐれ讃とさて

敵陣ぐ入軍乃最中ぐ味方れ讃とさーえて敵ぐん
をうえとぐーー内ぐ入くみくーひうち勝え
りうーをくーちをよおれぐ敵と服をれりぐく
をるとい勇ちけぐ中うり後ぐ地の裏といきて
敵乃城ぐ入をふ方便をうーーひうーふ
しうーう